霞 ―2017 年度春季展示室だより―

土浦市立博物館

平成29年5月13日発行(通巻第38号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々のくらし」を総合テーマに、春(５～６月)・夏(７～９月)・秋(10～12 月)・冬(１～３月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞（かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(38)
絵葉書「土浦八景川口の帰帆」

目　次

○古写真･絵葉書にみる土浦(38)・・１
○博物館からのお知らせ・・・１
【館長講座及び各展示と催し物等】
○古代の炊事具（古代）・・・・・・２
○古代の山寺(古代)・・・・・・・・３
○駿河国田中城を受け取る（近世）・４
○郷土を記録する(近代)　・・・・・５
○市史編さんだより・・・・・６
○地域と博物館・・・・・・・・７
○霞短信「夜景描写・今昔東西　土浦八景比定地を撮影して」・・・・・８
○コラム(38)・・・・・・・・・・・８
○情報ライブラリー更新状況・・・８

明治 40(1907)年頃に製作された「土浦八景」の一枚です。霞ヶ浦の土浦入りの風景で、かつて土浦の町の中心を流れていた川口川の河口にあたります。たくさんの高瀬舟が帆をたたみ、停泊をしている様子が見られます。江戸時代に詩歌や絵画で表現された土浦八景ですが、近代に入ってからも写真絵葉書のなかに登場しました。

【情報ライブラリー検索キーワード「川口川」】

博物館からのお知らせ

博物館マスコット
亀城かめくん

★★館長講座（茂木雅博館長）★★

５月 21 日（日）・６月 18 日（日）　両日とも午後 2 時～（1 時間 30 分程度）

テーマ：「東アジアからみた常陸の壁画墓」　会場：博物館視聴覚ホール

★★はたおり体験★★　6/17・6/24・7/1・7/8・7/15・7/22（いずれも土曜日）

さき織り（裂いた古布をよこ糸に使う織り方）を体験します。　**※要予約です。**詳細はお問い合わせください。

★★土浦ミュージアムセミナー２０１７★★

土浦地域の歴史について、学芸員が研究成果をお話します。

6 月　4 日（日）「盆綱―国指定文化財になった茨城の盆行事―」萩谷良太

6 月 18 日（日）「土浦の醤油醸造史」堀部猛

6 月 25 日（日）「霞ヶ浦沿岸の古墳時代玉作り」塩谷修

7 月　2 日（日）「土浦北部での土器生産―古代の根鹿北遺跡を中心に―」関口満

7 月　9 日（日）「土浦地域における戦国期の城下形成」比毛君男

7 月 16 日（日）「縄文時代の土器製塩について」亀井翼

時　間：各回午前 10 時～11 時 30 分まで
会　場：考古資料館 2 階　体験学習室
受 講 料：各回 50 円（資料代）
定　員：各回 50 人（当日受付）
お問い合わせ：上高津貝塚ふるさと歴史の広場
（０２９-８２６-７１１１）

★無料開館のお知らせ★

5 月 18 日（木）※国際博物館の日、5 月 21 日（日）

★今年度の春季展示は５月 13 日（土）～６月 25 日（日）までです。　※休館日は毎週月曜日です。

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合があります。

２０１７年度　春季の展示資料解説①　古代

古代の炊事具（すいじぐ）

―甑形土器（こしきがたどき）―

どこの家庭でもほぼ毎日行われる家事として炊事や洗濯などがあります。いずれも、健康維持や快適な生活を送るうえで大事な営みといえます。このうち毎日の食事をつくる炊事の中では、日本人の主食である米を電気炊飯器などの鍋釜（なべかま）で煮炊（にた）きするという調理法が重要な役割を担っています。

しかしながら、古代に目を向けてみると、現代とは異なる炊事の様子を示す道具が出土しています。下の写真は、市内常名（ひたな）の山川古墳群（古墳時代と平安時代の複合遺跡）でみつかった甑形土器です。灰色をした硬質の須恵器（すえき）製で、大きく開いた口径は 28 ㎝、底径 14 ㎝、高さ 20 ㎝で、バケツのような形をしています。底の部分に均整のとれた５つの穴が開けられているところが特徴的です（写真右）。カマドが造り付けられた平安時代の９世紀頃の竪穴住居跡（たてあなじゅうきょあと）から出土しました。

甑形土器の起源は中国大陸にあり、食物を蒸（む）す役割をもって誕生しました。古墳時代の５世紀頃、カマドの構築技術とともに朝鮮半島から日本国内に導入され、全国に普及しました。その使い方は、カマドに設置された甕形土器（かめがたどき）の上に重ねて用いました。甕形土器に入れた水がカマドの火力で熱せられ、その蒸気が甑形土器底部の穴をとおして内容物を加熱しました。当時の社会が稲作を重要な生産の基盤としていることや、鍋釜の役割を担う甕形土器に米を煮た痕跡が見られないことが、甑形土器が蒸すという方法でご飯を炊く主要な炊事具であったことを想定させます。この土器の存在は平安時代の９世紀頃までは明らかですが、その後は曲物（まげもの）などの木製甑にとって代わられたと考えられます。

土浦市内でも、古墳時代の６世紀前後にカマドの普及にともなって褐色をした土師器（はじき）製の甑形土器が使用されるようになります。その状況はいかにも必需品といった様子を示し、それぞれの竪穴住居跡から出土しています。平安時代の９世紀前後には須恵器製のものに代わり、10 世紀にはみられなくなります。

甑形土器は古代に暮らした人々の炊飯事情を反映した出土品といえます。　（関口満）

甑形土器（山川古墳群出土）

同土器の底

５／20（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示） ●根鹿北遺跡出土の甑形土器（当館所蔵） ●石橋北遺跡出土の甕形土器（当館所蔵）

２０１７年度　春季の展示資料解説②　古代

古代の山寺

―東 城 寺―

６世紀に日本に伝えられた仏教は、７世紀後半から８世紀に地方諸国にも広まります。金堂や講堂、塔などを備え、屋根に瓦を葺く壮麗な寺院の景観は、新しい時代の到来を感じさせるものだったことでしょう。

国分寺のような規模の大きな寺院が建てられる一方、仏教信仰の広まりとともに、新たな潮流も生まれてきます。一つは、集落のなかにも「仏堂」と呼ぶにふさわしい小規模な寺が登場することです。８世紀末から９世紀にかけて広まり、土浦でも田村・沖宿遺跡群や根鹿北遺跡で見つかっています。

もう一つの潮流は、山林寺院と呼ばれる寺の登場です。古くからある山岳信仰と相まって、古代の仏教には清浄な山で修行を行うことを重視する山林修行の伝統があり、厳しい修行を通じて呪力が得られるとされていました。神の山として古くから信仰を集めてきた筑波山は山林修行にふさわしい山であり、周辺には寺が各所に建てられたことがわかっています。土浦市北部にある東城寺もそうした山寺の一つです。

東城寺は、延暦 15（796）年に最仙によって開かれたと伝えられています。最仙は、常陸国内の寺院と僧尼を管轄する講師という職を務めた僧です。最澄の弟子とも伝えられ、天台教学を学んだ僧であったようです。東城寺のほかにも、土浦市の常福寺や行方市の西蓮寺、桜川市の薬王院なども最仙開基と伝えられています。

古代の東城寺は、現在の境内地の背後の山中にある堂平と呼ばれる地に建てられ、後に現在地に移されました。創建当初の寺の規模などはわかりませんが、屋根の軒先を飾る瓦が見つかっています。９世紀前半に国分寺の修理に用いた瓦と同じ文様です。伝えられる東城寺創建の年代に近く、山林寺院としての創建を裏付ける資料といえます。

筑波山周辺の山林寺院の多くが姿を消してゆくなか、東城寺は古代から中世への変革期を乗り越え、今日まで長くその歴史を刻んできました。

（堀部猛）

東城寺遠景

東城寺跡出土の瓦（当館所蔵）

５／27（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも中世コーナーに展示） ●東城寺経塚の出土品（複製　当館所蔵） ●鐃の鋳型溶笵（茨城県指定文化財　当館所蔵）

２０１７年度　春季の展示資料解説③　近世

駿河国田中城を受け取る

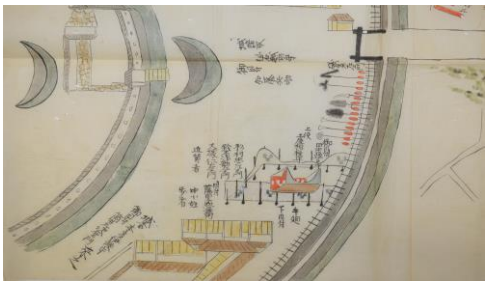
―土屋政直―

土浦藩主としてなじみの深い大名土屋家ですが、寛文９（1669）年の入国から明治維新までおよそ 200 年の間、一時支配が途絶えたことがあります。天和２（1682）年２月から貞享４（1687）年までの５年間、２代藩主土屋政直（1641～1722）は駿河国田中城（現静岡県藤枝市）を居城とする田中藩主になりました。田中城は平城で、本丸を中心に直径 600 メートルの同心円状に三重の堀があり、丸馬出し６ヶ所を有する武田流の城郭です。

土浦城から田中城への転封は、当時田中城の藩主であった酒井忠能（1628～1705）の改易（領地没収）に際し、政直が城明け渡しの上使を命じられたことに始まります。忠能は４代将軍徳川家綱政権で大老をつとめた酒井忠清の弟です。忠清は「下馬将軍」と呼ばれ、江戸城大手前下馬札の前に屋敷を与えられ、政治の実権を握っていました。家綱没後、忠清は後継に京都から有栖川宮幸仁親王を迎えようとしましたが反対にあい、綱吉が将軍に就くと同時に大老を退きました。忠能の改易は在国中の逼塞と職務怠慢が理由ですが、兄忠清の失脚もその要因といわれています。

天和元（1681）年 12 月 14 日、政直に田中城受け取りの上使として現地に赴くよう命が下りました。この時政直は 41 歳、奏者番として将軍に仕えていました。改易は切腹よりは軽いものの、蟄居よりも重い処分です。政直は軍備を整えて田中城に向かいました。家臣の隊列を書き留めた「田中御上使御行列」によれば、総勢 1,511 人、馬上の政直を先導する徒（徒歩の侍）は 30 人、左右には中小姓 20 人が付き従いました。「駿州田中城御受取之図」では、土屋家の家紋三石が入った幔幕を張って政直が陣取った場所の周辺に長柄や長刀、毛槍などの武器が高々と飾られ、物々しい雰囲気です。城門の外には大筒、持筒、鉄砲、弓、長柄、騎馬などの大部隊が控えました。

田中城は翌年１月４日、無事に明け渡され、忠能の身柄は彦根藩にお預けとなりました。１月 28 日、政直は江戸に戻り、２月 12 日、田中藩４万５千石に領地を替えるよう命じられました。政直は２年後の貞享元（1684）年７月には大坂城代となり２万石を加増されました。同２年９月には京都所司代、同４年 10 月には老中へと大出世を遂げ、同時に再び土浦藩主に任じられました。28 年続く綱吉政権の最初に行われた酒井家改易での功労が、政直の出世と加増につながりました。　（木塚久仁子）



「駿州田中城御受取之図（部分）」（個人所蔵）

６／３（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示） ●「田中御上使御行列」（天和元年　個人所蔵） ●「道歌　土屋政直」（江戸時代中期　当館所蔵）

２０１７年度　春季の展示資料解説④　近代

郷土を記録する

―柳沢鶴吉の柳旦堂（りゅうたんどう）―

近代の土浦に関する資料をひもとくとき、発行元としてよく目にするのが「柳旦堂」です。柳旦堂の主人は柳沢鶴吉（1864～1924）といい、父柳旦のあとを継ぎ、医薬や書籍販売を生業（なりわい）としました。

鶴吉は書籍の販売だけでなく、編著者として本の作成に携わりました。明治 34（1901）年には霞ヶ浦沿岸を自ら実地踏査し翌年『霞浦唱歌』を発行、その後土浦町付近より更に筑波地方を調査し、同 35 年には『筑波山と霞ヶ浦』を刊行しました。従来の名勝記は水戸を中心としたものが多く土浦地方及び南部の勝地が詳しく紹介されたものがないことを、刊行理由としました。同 41 年に刊行した『名勝古跡　常山総水』の序文では次のように述べています。

（前略）三九年仲秋、日露戦争平和克復せしを報賽（ほうさい）に常総五社参拝会を笠間町有志者企てて大に東京紳士を招かんとせしも時運到らざるか意の如く応募者少なかりしは必竟之（ひっきょうこれ）に対するに一括したる名勝案内なきによれりと信ず、爾来（じらい）本書を編輯（へんしゅう）せんと欲して南船北馬し見聞せしまま筆記せしものなれば、素より文辞一定せずこれ余が浅学不分（せんがくふぶん）を咎むる勿れ、唯だ遊覧の栞（しお）りと為すにあるのみ（後略）※一部現代かなづかいに改めています。

遊覧の栞にと述べてはいますが、本書は 60 余りの資料をもとに、東京方面からの訪問客も想定し、茨城・千葉両県の鉄道沿線の名勝古跡の紹介を試みた、鶴吉の労作でした。

柳旦堂は写真絵葉書も発行しました。日露戦争をテーマとした絵葉書が人気となって以来、各地で名所・旧跡の絵葉書がつくられ、土浦では柳旦堂や寺田書店が制作しました。下の写真は絵葉書「土浦風光」です。撮影地は小松の高台付近でしょうか。筑波山周辺の山並みから霞ヶ浦方面までの広い範囲が大パノラマとなり、①「土浦市街の一」②「土浦市街の二」③「霞ヶ浦々頭」④「霞ヶ浦沖宿崎」として４枚の絵葉書に仕上げられました。

郷土の歴史や風景を出版し広める―『名勝古跡　常山総水』の３分の１近くは商家や商店の広告で、柳旦堂で扱う医薬や書籍の広告も多く、鶴吉は広告宣伝に積極的でした。名勝古跡の紹介記事には、所々に家業の傍ら俳諧の道に精進した父柳旦の俳句も添えられています。自らも二世柳旦として土浦俳壇に足跡を残した鶴吉は、郷土の歴史や風景と、それらを詠んだ文芸もともに記録し伝えようとしたのでしょう。　（野田礼子）

①

②

③

④

絵葉書「土浦風光」（当館所蔵）

６／10（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近代コーナーに展示） ●看板「土浦柳旦新聞店」（個人所蔵） ●『近世土浦小史』（明治 39 年　当館所蔵） ●『霞浦航空隊めぐり』（大正 13 年　当館所蔵）

市史編さんだより

長嶋尉信の来翰集を読んで

長嶋尉信については今までにも「霞」で何度かご紹介し、『長島尉信著作集』も刊行しましたので、ご存じの方もいらっしゃるかと思います。その尉信に宛てた書状を、尉信自身が貼り合わせて冊子に仕立てたものが「来翰集」（当館所蔵）として残されています。全部で650点以上の書状の中から土浦に関係のあるもの、尉信の性格や事蹟を知る上で貴重と思われるものを選び出し、現在解読しているところです。その中に見えてきた尉信の姿を述べてみたいと思います。

前にもご紹介しましたが、尉信は水戸藩主徳川斉昭に招請されて検地に従事したあと、土浦藩に呼ばれて検地を行いました。その経歴から藩の利益を大事にして農民を苦しめたように思われがちなのですが、決してそうではなかったことが、この来翰集を読むとよく分かります。26冊にまとめられたうちの最初の1冊は、水戸から土浦へ赴任した時の様子が尉信自身によって記されており、そのあとに綴り込まれた書状は、ほぼ土浦へきてからの天保14(1843)年以後のものですが、中にはそれ以前のものも少しあります。

いかに尉信が農民の暮らしを豊かにすることに力を注いだか、よく分かる書状があります。それは水戸藩領の湊村、現在のひたちなか市に住んでいた堀川潜蔵という人からのもので、そこには良質の肥料である南部粕の入手について、容易には手に入らない品だが、近所に住んでいる旧家で、諸国の農商人と取引している井坂という家の息子孝七に頼んで買い入れることが記されています。そしてその本人孝七からも、尉信と土浦藩士で郡奉行を務めていた藤森弘庵の２人に宛てて、高値の岩城粕を安く仕入れることができたので、ご入用ならお申しつけください、という手紙がきています。藤森弘庵も何とか農民の暮らしに寄与しようと、灯心の栽培を奨励した人で、尉信とは志を同じくしていました。良質の肥料を使うことによって収量が増せば、農民も藩も共に豊かになる、というのが２人に共通する願いだったと思われます。弘庵が土浦藩を辞して江戸に移った後も、尉信に書状を送っていることからも、弘庵の尉信に対する思いが伝わってきます。

直接土浦に関係する人ではありませんが、関宿藩の家老にもなった船橋随庵という人からの書状が25通もあり、24冊目はすべて随庵からのものです。関宿（現千葉県野田市）は利根川と江戸川の分岐点に位置していて、洪水に悩まされることが多いところでした。そのため関宿用水を造って、農民や住民の苦難を救おうとしたのが随庵で、手紙にもその状況が詳しく述べられています。随庵は尉信に師事して遂に用水を完成させました。このことからも尉信が自分の学問をいかに実際に用いて、農民を豊かにしようとしたかが分かると思います。余談ですが随庵に尉信を紹介したのは、関宿藩領であった江戸崎（現稲敷市江戸崎）の醤油醸造家なべやの番頭で、文化人としても有名だった林清輔です。そういう人とも尉信は交流があったのです。このような尉信に惚れ込んで土浦に招くことに情熱を傾けたのが大久保要で、要からの手紙は23通にものぼります。それらを読むといかに要が尉信の学識を尊敬していたかよく分かります。自分の息子の教育も頼んでいるくらいです。要からの手紙はまだ尉信が水戸藩にいるころからのものもあって、尉信を土浦に誘っている熱心さが伝わってきます。しかし尉信の土浦藩における待遇は、水戸藩に比べてよくなかったようですし、藩士の中には小田村の名主であった尉信を軽んじるものも多かったようで、尉信は熱心に誘っている要の手紙のあとに、自身で苦情を書き込んだりしています。それでも尉信は慶応元（1865）年に隠居するまで20年近く土浦藩に勤めました。色川三中・美年兄弟、神龍寺の如蓮・東光寺の大如などの手紙からは、親切で飾らない尉信の人柄がよく伝わってきます。このように色々な意味で興味深い資料といえるのではないかと思います。

（市史編さん係非常勤職員　菅井和子）

地域と博物館

博物館の役割（2）～調査・研究～

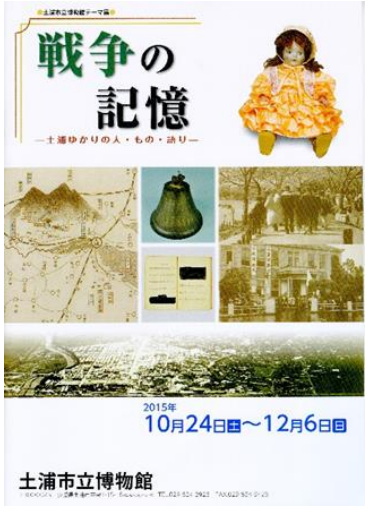
博物館で行われるすべての活動は、資料の収集と共に地道な調査・研究活動に支えられています。とくに、テーマを設け開催される特別展は、数年かけて調査・研究が継続され、その成果が展示となって公開されるものです。日本の代表的な博物館である東京国立博物館の年間スケジュールをみると、多彩なテーマの特別展が年間５回も開催されており、いずれも会期が２ヶ月ほどの大規模な展覧会です。展示替えなどを考えると、年間を通して、連続して間断なく特別展が開催されていることになります。特別展が博物館の調査・研究成果を公開する場であることを考えると、このような積極的な展示活動が容易でないことは明らかで、小規模で人的にも零細な地域博物館にとってはなおさら難しく、そのためには調査・研究より展示やその企画を優先する意識的な博物館活動を展開する必要があります。

当館でも昭和 63（1988）年の開館後、およそ 10 年間は、年間４回の特別展・企画展を開催しておりました。展覧会と開催に向けた調査・研究は博物館活動の両輪となり、４人の学芸員による自転車操業が繰り返され、疲弊する中で、地域博物館にとって活動の基礎を支えるべき調査・研究の充実が大きな課題となりました。

その後は、調査・研究を優先した特別展を心掛け、長年継続してきた市民によるはたおり教室の活動と聞き取り調査の成果を公開した「暮らしにいきづくはたおり」、大学など外部研究者との共同研究で行った土浦幼稚園関係資料調査の成果を公開した「幼児教育コトハジメ～マチの学び舎（や）、土浦幼稚園～」、当市の市史編さん事業として色川三中の日記「家事志」を全６巻に翻刻し、その研究成果を公開した「次の世を読みとく－色川三中と幕末の常総－」などを開催しています。いずれも、数年から 10 年以上をかけた博物館による調査・研究の蓄積をもとに、その成果をぜひ多くの市民に紹介したいという目的から、企画・開催に漕ぎ着けたものばかりです。

開館 20 周年に行った総合展示へのリニューアルを契機に、あらためて博物館活動の重心を展示以外の活動に移すこととし、とくに調査・研究を重視する方向に転換しました。現在、特別展は年１回のみとし、収蔵品を紹介するテーマ展や総合展示（季節展示）の展示替えなどを行いつつ、博物館に与えられたもうひとつの活動である市史編さんとも連動させて、地域博物館の第二の役割である調査・研究の充実を目指しています。

（塩谷　修）



戦後 70 年を契機に、５ヶ年計画で「市民の記憶」収集調査をしています。
（左は調査の広報を兼ねたテーマ展パンフレット、右は調査の途中成果を紹介した展示コーナー　H28.　8）

霞短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、第38回特別展「土浦八景」の関連企画「写真でみる土浦八景の今昔」にご協力いただいた関郷さんに寄稿していただきました。

夜景描写・今昔東西　土浦八景比定地を撮影して

大きなフィルムカメラを担いで辺境を歩いた世界的な風景写真家アンセル・アダムスはこう言っています。「風景写真を撮るなら朝早く、もしくは夕方遅く、または、気象の激しい時（筆者意訳）」。「土浦八景」撮影の話を頂き、撮影プランを立てている時、この彼の言葉を思い出しました。瀟湘八景はまさに彼の言葉を体現したものではないか？ 無論、時代は逆ですが、洋の東西を問わず美意識の根底には人類共通の遺伝子が存在するのかも知れません。

ただ、東洋には違う手法が存在します。特に夜景。写真芸術がスタート地点にしたであろう西洋画の、たとえばターナーやマルケの夜景は見るからに夜。暗闇に月や星、そして人工的な光源を描くことで夜が描写されています。

しかるに東洋画の夜景はまるで昼。たとえば土浦八景「田村夜雨」。低く垂れ込めた雲の下、湖岸の寒村の燭台の灯りが微かに雨粒を照らすのみであるはずの漆黒の彼の地は、しかし明瞭に描かれています。このイマジネーションは何処から来るのか？ 湿地の雨を感じる五感、あるいは水郷のＤＮＡ、あるいは知覚を超越した空想力？ これは八景のどのシーンにも共通するように思えます。創る側観る側、静謐な自然との関わりの中で受け継がれてきた東洋の古典的仮想現実…。

翻って、慢性的に明るい土砂降りの田村の堤防の上、防雨処置を施した投光器とカメラを操作しつつシャッターを切り、デジタル処理の上プリントする。実は肉眼ではこうは見えていない風景なのです。事前のイメージを計算と段取りで描写した現代バーチャル写真。ふと立ち止まって観ると、これは東洋的伝統の一部なのか、という疑問。いえ、東洋的なものが世界のビジュアル文化に与えたであろう影響は感じつつも、これはもはやデジタル写真のスタンダードと化してしまっているのではないでしょうか。

それにしても、アダムスは泉下でどう思っているのか少々気になる所ではあります。が、彼はまたこうも言っています。「写真は撮るものではない。創るものだ」。現代的日和見解釈で失礼します。　（関 郷）

コラム（38）　「岩崎」をさがして

博物館では、この春、特別展「土浦八景」を開催しました。展覧会を準備するなかで、新たな資料との出会いがいくつもありました。特に印象深いのが「土浦十二景図巻」です。「霞浦漁船」に始まる十二の題に和歌とその風景を描いた絵が描かれています。現在の土浦市域周辺から選ばれていることは直ちにわかりましたが、その一つ「岩崎躑躅」がどこなのかはしばらく謎でした。地名をたよりにつくば市（旧茎崎町）の上岩崎・下岩崎などを訪ねましたが、それらしい場所は見当たりません。館内でそんな話をしていると、描かれた風景に見覚えがあるという職員がいました。場所はつくば市大形の鹿島神社です。行ってみると、神社裏手の旧大形小学校の敷地内に小高い岩山があり、「岩崎山」という看板が立っていました。200年以上前に描かれた場所にようやくたどり着いた瞬間でした。新たな資料が、〈謎〉とささやかな〈発見〉をもたらしてくれました。（堀部猛）

情報ライブラリー更新状況

【2017・５・13現在の登録数】

古写真	577点	（＋５）
絵葉書	489点	（＋５）

※（　）内は2017年１月５日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。１ページで紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ）　２０１７年度
春季展示室だより（通巻第３８号）
編集・発行　土浦市立博物館
茨城県土浦市中央１－１５－１８
ＴＥＬ　０２９－８２４－２９２８
ＦＡＸ　０２９－８２４－９４２３
http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php？code=43
１～５ページのタイトルバック（背景）は、博物館２階庭園展示です。

次回夏季展示は、**2017年７月１日（土）～９月24日（日）**となります。「霞」2017年度夏季展示室だより（通巻第39号）は**2017年７月１日（土）発行予定**です。次回の来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます（カラー）